都弱視研

東京都弱視教育研究会
世田谷区桜丘5－19－1
発行人　後藤真司
印刷　依田印刷㈱
第51巻　2号発行　R3.12.13

17校で手を携えて

東京都弱視教育研究会 副会長
東京都立葛飾盲学校 校　長　田島　忍

東京都弱視教育研究会における諸事業は、令和３年度もコロナ禍の影響を受けながらのスタートとなりました。しかし、令和２年度から導入していたオンラインによる研究会の実施経験を生かしながら、事務局の先生方の多大な御尽力により、研究全体会や研究総会などをほぼ計画通りに開催することができています。また、会場に集合する形式とオンライン形式とを組み合わせた、いわゆるハイブリッド形式による会の運営も実施できていることは、大変ありがたいことです。

私は副会長を務めて３年目になりますが、１年目の令和元年度には、研究会の終了後に会場校の近くの飲食店等で親睦を深める場を設けていただいたことがありました。そのような機会には、会員同士で楽しく交流し、有意義な情報交換ができましたし、貴重な人脈を構築することもできました。今後、社会情勢が落ち着いた段階で、この都弱視研の魅力の一つである交流の場を再び設定できることを願っております。そして、東京都内において共に弱視教育に携わる同志として、区市の枠を超えて結束を強めていきたいと思っております。

さて、弱視の生徒を主人公とした「ヤンキー君と白杖ガール」という人気漫画の実写版が制作され、テレビの連続ドラマとして放送されたことに注目した先生方も多いのではないかと思います。私も視聴しましたが、大変感動するとともに、視覚障害教育についての理解啓発の面で絶大な効果があるものと期待をもちました。例えば、視聴者が弱視の人の見え方をテレビ画面を通して疑似体験できたり、点字ブロックの上に物を置かない理由について理解を深められたりすること等が挙げられます。これは全国盲学校長会で情報共有したことですが、横浜市立盲特別支援学校が、監修、演技指導などでドラマ制作に協力しています。主人公の赤座ユキコは盲学校高等部本科普通科３年生という設定であるため、実際の教室や図書室などのシーンは、校内で撮影が行われたそうです。白杖の振り方や拡大読書器の使い方などを指導された先生方にも、やはり理解啓発につなげたいという熱い想いがあります。

この白杖ガールに関することとして、日本弱視教育研究会が主催する第62回の全国大会（宮城大会）が令和４年１月にＷｅｂ開催されますが、漫画家のうおやま氏を講師とする基調講演が行われる予定です。「『ヤンキー君と白杖ガール』を描いて今思うこと」という演題で、対談の模様がライブ配信されるそうです。このタイムリーな企画に、弱視教育に携わる全国の多くの先生方が期待を寄せていることでしょう。

今後も、日弱研におけるスケールの大きな学びの機会を大切にしながら、私たちの都弱視研が益々充実し、発展していけるよう、加盟する17校で手を携えて歩んでいきたいと思います。

第４回　研究全体会（研究授業）

令和３年７月５日(月) 町田市立本町田東小学校

「弱視児童・生徒の自立活動に関する指導内容・方法の研究」

― 発達段階に応じた自己理解の指導の在り方 ―

講師　広島大学大学院 准教授　**氏 間 和 仁** 先生

1 研究授業

対象児童　第３学年　１名
授 業 者　石井ひろ夢 教諭
題 材 名　「自分のことを知ってみんなに伝えよう」

2 授業者自評

- ５つのステップを踏む活動を通して、自己理解を深めることをねらいとしました。
- 自身をより多面的に捉えられるように、大切なことや得意なことにも着目しながら、視覚機能に焦点化しすぎない展開を心掛けました。

3 質疑応答・協議

- ジャムボードを活用する際の工夫について知りたいです。⇒より主体的に活動するために、ジャムボードを活用しました。タブレット端末では文字が小さいため、モニターを使用し、本児の見えやすさに合わせています。
- 自己理解の指導において、保護者の思いをくみ取りながら行うことの難しさを感じました。特に、障害を理解してほしいがどのように知らせていくのがいいのかと葛藤がある場合、保護者と話し合い、連絡を密に取り合う必要があります。
- 自分の考えを落ち着いて発言できており、これまでの丁寧な指導や関係構築の表れを感じました。
- 本時を映像に記録することで、自分の思いを表現しにくくなる場面や葛藤する場面が明確になり、今後の指導の方向性を考える材料になると思いました。

4 指導・助言、講話

（1）研究授業について

- 自分のことを知って伝えるための５つのステップ(知る、考える、伝える、リーフレット作成、振り返る)はよいと思います。効果的な学習ができたかを、ステップごとに振り返ることが大切です。
- 一対一の指導では対話と内省の減り張りをつけ、ひとりで考えながら自分と向き合う時間も確保したいです。

（2）自己理解について

- 経験を生かして自分を知る工夫として、朝起きてから夜寝るまでのタスクを並べて困ったことを振り返る、教科や活動別に考える、などが挙げられます。
- 自身の見えにくさの程度を理解することは大変難しいです。教師の実体験を聞く中で、自分の体験と比較しながら見えにくさの程度を知る方法もあります。
- どのくらい小さいものが見えるのか、どれくらい視野があるのか、自分の視機能を理解して日々の生活に返していくことが、自己理解につながります。

参考：視野の名称と役割

①識別視野：視力・色覚に優れている。
②有効視野：特定の情報を瞬時に認識できる。この視野内では眼球運動だけで scanning（走査）することができる。
③誘導視野：ものの有無がわかる程度の解像度だが、方向感覚に影響を与える。
④補助視野：情報の需要力は低いが、大きく速く動くものに反応し、注視運動を誘導する。
※①②の範囲を越えると、注視するために頭部と身体の動きを伴う。

（記録　立石中学校　池田　祥将）

慶應義塾大学　オンライン見学会報告

今年度の見学会は、７月26日（月）、オンラインでの講義形式で開催されました。

講 義 名：「視覚に障害のある学生の支援と学習環境」

講　　師：慶應義塾大学教授　中野　泰志 先生

1　はじめに

障害のある大学生の人数は、飛躍的に増えており、全国の大学、短期大学、高等専門学校で学ぶ障害学生は37,647人で全学生の1.17％を占めています。

2　障害のある学生への支援に関する基礎知識

国際条約　「障害者の権利に関する条約」において、一生涯を通じた教育を保証していくことが述べられています。また､「マラケシュ条約」で、視覚障害者等による著作物の利用機会促進が促されました。

国内法　「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が令和３年５月に改正され、３年以内に民間事業者にも合理的配慮が義務化されることとなりました。読書バリアフリー法が成立し、学校図書館等が教科書以外の書籍について著作者に了解を得なくても、PDFなどそれぞれが使える形で製作・提供できるようになりました。

その他　東京都の条例で2018年から合理的配慮をすべての事業所に対して義務化しました。条例に違反している場合は、都に対して調停の申し込みをすることができます。

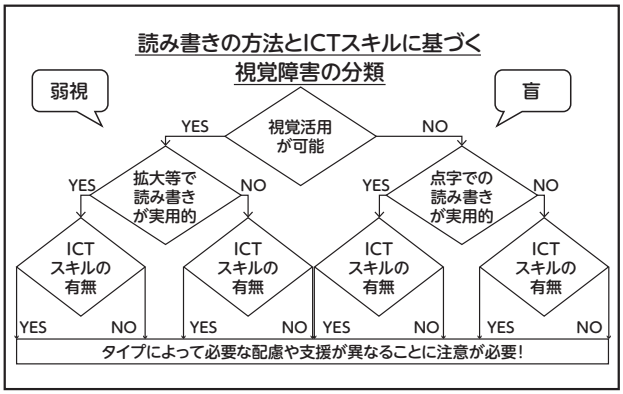
また「障害のある学生の修学支援に関する検討会報告」いう文部科学省のガイドラインもあります。弱視の学生が様々な支援を受けるためには、自ら交渉していくことが必要です。その際のキーワードは「合理的配慮」と「基礎的環境整備」です。

3　視覚障害のある学生への支援の実際

同じ視覚障害でもニーズは多様で、必要な配慮や支援方法は異なります。自分のことを説明するときに、視覚活用がどの程度可能なのか等を具体的伝えていきます。要望を聞き入れてもらえなかった場合にそなえて、プランＢ、プランＣを用意して交渉していくことも大切です。慶應義塾大学には、小学校から大学院までのすべてをサポートする仕組みとして慶應義塾協生環境推進室があり、連携して支援を行っています。

4　おわりに

大学・学部の決定には早期からのキャリア教育の観点が大切です。これと同時に、キャリア教育の中では合理的配慮を含めて自分の力であると考えてください。そのために、学生にはより質の高い必要な量の合理的配慮を受けるための対話交渉スキルを持っていてほしいと思います。



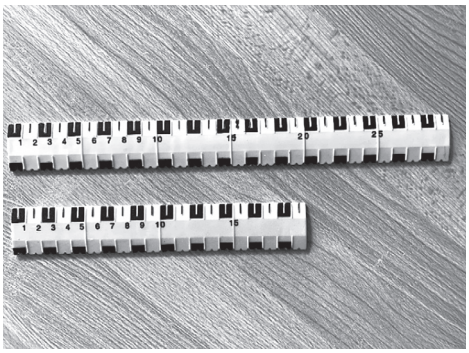
（記録　第四葛西小学校　佐野　友美）

視覚教育情報コーナー

ロービジョン用ものさし

通常売られている定規は数字が見えにくく使いづらい物が多いかと思います。こちらはイギリス製の定規で、30cmと20cmの2種類があります。ベースの色が明るい黄色なので黒い数字が見やすくなっています。数字は、10cmまでは１cm毎に、後は５cm毎の表記に留めていますが、１cmおきに黒い色が塗ってあり、５mm部分の表記を交互に短い白線と黒線にするなど、見やすく作られています。また、こうしたロービジョン児・者に配慮した工夫だけでなく、触覚でも確認できるよう、５mm間隔の盛り上がった短い棒線、１cm間隔に長い棒線、５cm間隔にはさらに長い棒線がついています。また、片方の辺はストレートですが、もう片方の辺は5mm毎に小さな山型になっています。裏にはすべり止めがついていて、ずれにくくなっています。

大阪の「ジオム社」という会社が輸入販売しています。この会社は、白杖を中心に、海外の視覚障害者用グッズを多く輸入しており、日本点字図書館とは品揃えが異なりますので、ぜひHPをご覧ください。



（都立久我山青光学園　山﨑　かおり）

アンテナ　No.74

東京都立文京盲学校

東京都立文京盲学校は、高等部普通科と、職業課程である専攻科からなる高等部単独の盲学校です。現在の生徒数は、普通科46名、専攻科22名の計68名です。「盲学校」というと全盲の生徒をイメージされがちですが、実際には全体の半数以上は、墨字（普通文字）を使用する弱視の生徒です。

今年のパラリンピックに本校普通科3年生の木村由さんが出場しました。種目はPR3混合舵手付きフォアというボート競技で、運動機能障害、視覚障害の男女4人の選手と、コックスと呼ばれる司令塔役の健常者1人の5人がチームとなって競います。もともと運動が得意で、学校ではフロアバレーボール部に入って活躍していた木村さん。この競技を始めるきっかけになったのは、東京都主催のパラスポーツ次世代選手発掘プログラムでした。パラリンピックの結果は12位でしたが、一回りも二回りも成長して学校に戻ってきた木村さんは、競技を通して学んだことや、選手村での外国の選手との交流の様子などを、全校生徒の前で報告してくれました。

文京盲学校の部活動でも、一番人気は運動部です。フロアバレーボールのほか、ゴールボール、サウンドテーブルテニス（卓球）、陸上、水泳など、視覚障害があっても存分に体を動かせる種目がたくさんあります。弱視学級の皆さんも、ぜひ、機会を見付けてスポーツを楽しんでほしいと思います。　（名取　恵津子）